

森山豊明著『語る日本史データベース』

山口 吉彦

本書は、筆者森山豊明氏が二五年余にわたり、数多くの実物教材を駆使し、穏やかな口調ながらも、巧みな「語り」で生徒を引き込んで展開した授業の「実践書」である。同時に評者のような後輩教師への「応援書」でもある。

評者は以前、青森県高教研地理歴史公民部会総合研究大会で二度、筆者の発表を拝聴させていただき感銘を覚えた。その時拝見した教材が、本書には多く記載されている。近年、筆者は『歴史教材友の会』を発足させ、青森県内はもとより全国の先生方と、実物教材や視聴覚教材を積極的に授業に持ち込み、魅力ある授業をめざして活動しておられる。本書は書名の通り、そのためのデータベースである。

本書の構成は次の通りである。

序

まえがき

原始・古代

「人類の登場」→「院政期の文化」

(計五七テーマ)

中世

「源平の抗争」→「斎藤道三」

(計三七テーマ)

近世

「ザビエルと『大ウソ教』」→「山片蟠桃」 (計七〇テーマ)

近代

「ペリーの来航」→「戦争に名を借りた蛮行・三光作戦」

(計一二一テーマ)

各時代の末尾にはテーマごとの出典や参考文献が所収されている。

本書は前述したように、研究書ではなく、実践書である。筆者が取り上げたテーマは総数で二八〇に及び、本書の性格上、一つ一つの史実の検証などを論究することはなじまない。そこで、浅学な評者の感想・所見を述べさせていただいて紹介に代えたいと思う。

まず、味読させていただいた第一の印象は、出典・参考文献が多岐にわたる分野からの引用であるということである。専門的な文献から一般書・小説、さらに漫画本まで幅広いジャンルから取り上げている。これは筆者の読書量の多さを物語っているが、さらにその題材を少なくとも一年くらい推敲した上で教材化している(三〇六頁)。各テーマの「語り」も筆者の練りに練った構成のもとに展開されている。それが本書にもにじみ出ている。

授業の主役は生徒である。生徒が感じ、考え、感動することが大事なのである。本書にはそのための工夫が随所に散りばめられている。具体例を少し挙げてみる。

・原始古代の日本について「衣食住」という我々の生活と身近な物と関連づけて(句玉など)展開する。 (二六頁)

・高松塚古墳の実物大の模型を使い、生徒に歴史的遺物の実際の大きさを実感させる。 (四〇頁)

・天平文化に関しては、正倉院宝物のレプリカ等を駆使しながら、生徒に「見る・嗅ぐ・味わう」を体感させる。(四四頁)

・平安仏教では映画『空海』から真言を録音し、生徒に聴かせて臨場感を出す。(四八頁)

・鎌倉仏教のまとめのプリントとして井上ひさしの『道元の冒険』を活用する。(九四頁)

・南北朝の動乱について、授業に変化をつけさせたい時、楠正成の紙芝居を利用する。(九七頁)

・鉄砲の伝来については、複製の火縄銃を教室に持ち込み、生徒に触らせる。(一二五頁)

・参勤交代では地元の弘前藩を例に日程を確認させ、郷土史と通史を関連づける。(一二〇頁)

・虫食いの本物の古文書から時代の動きをつかませる。(一二九頁)

・江戸時代の飢饉等については、浅間山大噴火時の発掘された本物の軽石に触らせながら授業を展開する。(一八六頁)

・奄美の黒砂糖については、サトウキビを教室に持ち込み、なめさせてみる。(一九六頁)

・近代以降は写真を多く取り入れ、歴史上の人物をぐっと身近に引き寄せる。(二一八頁)

・足尾銅山鉱害事件では本物の足尾銅山の銅鉱石を見せる。(二九二頁)

などの工夫がなされている。
これらの実物教材等は生徒の歴史への興味・関心を大いに喚起させる

ものである。そのみならず、さらに次の段階として、

・中世「阿豆河莊」の訴状を実寸大に拡大して、生徒に配り当時の農民の様子を気づかせる。(八九頁)

・織豊政権のまとめで海援隊『俺は信長』のテープを聴かせ歌詞の穴埋めをさせる。(一三四頁)

・『カムイ伝』の抜粋の冊子を配り、近世の非人の状況を読みとらせる。(一五八頁)

・近世の『塵劫記』に記されている問題を実際に解かせてみる。(一七六頁)

・近世の飢饉の惨状について、八戸藩の場合を例にとつて、実際に計算させ実態に迫ってみる。(一八六頁)

・勝海舟の『氷川清話』をプリントにして同時代の人物を紹介し、それが一体誰なのかを答えさせてみる。(二三一頁)

・近代の地租改正の授業では本物の地券を一人一人に渡して内容を把握させる。(二四〇頁)

・文明開化について当時の新聞の切り抜きで様子を読みとらせる。(二四四頁)

・明治の女工の生活について、プリントを用いて、生徒に読みとらせる。(二九四頁)

これらは授業における生徒の能動的な取り組みを促すものであり、実物教材や視聴覚教材を組み合わせるにより、いわば体験的学習を教室で演出しているものと言えよう。

「実物」という「重み」のあるものを使いながら、魅力ある授業を展開

開するためには、何よりも指導する教師の研鑽が不可欠であることを本書は多くの場面で指摘している。

- ・生徒を授業にぐいぐい引っ張り込むためには、ある程度の人物への感情移入が必要であり、そのためには歴史上の人物に対する鮮明なイメージが必要である。(六二頁)

- ・要点をふまえて説明すれば、生徒は真剣に聞いている。

(一三六頁)

- ・こちらのりのりにつて話をしている時は、明らかに生徒の目つきが変わってくる。(一三六頁)

- ・授業の教材を深化・焦点化するためには、膨大な題材が必要であり、教師はそれを消化しなければならない。(二〇二頁)

(二二六頁)

- ・常に問題意識を持ち、授業を再構成してみる。
- ・文化は教えるべき項目が多く、授業が散漫となりやすいが、ここぞというところで簡潔な説明をする必要がある。(二九八頁)

- ・平板となりがちな文化の授業の中ではその時代の様々な制約の中で精一杯生き抜いた人物の一生を追いかけることが、その人物と時代性を鮮明に浮き彫りにする。そんな取り上げ方も必要である。

(三〇二頁)

これら筆者の指摘は、現場の教師として常に忘れてはならないものを含んでおり、再認識する上で重要である。平成十五年度から施行される高等学校学習指導要領の「日本史B」の内容の中にはそれまでの「理解させる」から「考察させる」に文末が変わった箇所が多数見られる。これは物事に対して、多面的・多角的な思考を促し、公正な判断力を養う

ことを意識させるためのものであるが、本書の内容はそれを具現化する一助になるものである。

本書「テーマ」の中でも近代に関する内容が多く取り上げられている。中でも戦争に関する授業のあり方に対する筆者の指摘は重要である。近代の戦争については、起こった背景・戦争の経過を重視すべきで、事後の条約の内容や影響のみに力点を置く指導に疑義を呈していることや、「日露戦争を客観的に歴史に位置づける作業を当時怠ったことが、大きな過ちを生んだことを生徒に教えることが歴史教育である。」(二八五頁)という筆者の指摘は現場の教師として個々が考えなければならない大切な要素を含んでいる。

本書は二八〇にも及ぶテーマを取り上げているが、もちろん限られた授業時数内でこれら総てを網羅した展開を実践することは不可能である。本書を「データベース」として、個々の教師が取捨選択し、研究を重ねて自分の教材として使用することが重要である。またあくまでも私見であるが、本書近代以前のテーマについて、史実として考証されていないいわゆる「エピソード」の取り扱い方については、細心の注意が必要であろう。生徒の興味関心を喚起し、授業に引き込む手段としては非常に大切な要素であるが、教師側の慎重な配慮がより重要である。

以上、同じ教育現場にある者として、本書の紹介と評者の感想に終始したが、力量不足のため、本書真意を曲解した恐れもある。その点は筆者並びに読者にお詫び申し上げますなければならない。

本書の最後のテーマは、第二次世界大戦に関する内容である。筆者の指摘する「戦争の風化」、「高校生が小・中学校の教育の中で、様々な事

情により、正しい歴史的事実を教わっていないのが現実である。」(三四七頁)という視点は、教師のみならず、現代社会に生きる人間として責任を持って対処していかなければならないことを示唆していると思う。

「たった五六年前に本当にあつた出来事である。目をそらし、耳を覆いたくなるような話でも事実として教える必要がある。」(三四七頁)という記述は評者も共有する思いである。ぜひ多くの方々に一読を勧めたい。

(A5判、三七二頁、文芸社、二〇〇一年一月刊、一五〇〇円)

(やまぐち・よしひこ 青森県立八戸高等学校教諭)